



説書 其の志なり 下

ツス

5  
4444  
2









そのまけき井よりくく花のまの清きにつき  
 つらまれば木の葉を拾ひてたおちやわらわ  
 後て四糸神とち次判士よつり小をふま  
 家も其いふや志とるふ儀や楽にあはる  
 りの節と盆よ似るるいふ人さ禮中意  
 事臨月をぬひ鶴籠にはたたきさるる  
 あふまも貞孝の跡とるるはとの畑ふ  
 びくおはるふ小意庵雪梨の灯りあす

極書書

え縁二の秋

一泉亭く極吟

紗暑あつらふ毎に斜日風加子 芭蕉  
 ちかさまして秋叶日乃乾 一泉  
 月よりも切舟とる清よる終て 友住  
 遠るきうひし紀邑乃生垣 ノ空  
 継継治門をかきく楳の音 竹意  
 小桶の清あむまぬ何事言 語子  
 ちのより生具きく雲婦の思 雲口  
 色移しやる西也栗原 乙垣



保るらふふらふ乃何ふ心地一々  
 如きしは是れを會ししやう月  
 礼を<sup>ニヤキ</sup>と<sup>ニヤキ</sup>一々<sup>ニヤキ</sup>守  
 托のうまふり午<sup>ニヤキ</sup>流<sup>ニヤキ</sup>志  
 どの家るわらふ<sup>ニヤキ</sup>泉  
 けく<sup>ニヤキ</sup>境<sup>ニヤキ</sup>目  
 系<sup>ニヤキ</sup>枝  
 是<sup>ニヤキ</sup>口  
 草の戸<sup>ニヤキ</sup>浪  
 畑<sup>ニヤキ</sup>生

下ノ二

不<sup>ニヤキ</sup>枝  
 入日<sup>ニヤキ</sup>道  
 何<sup>ニヤキ</sup>珠  
 何<sup>ニヤキ</sup>枝  
 河<sup>ニヤキ</sup>枝  
 麦<sup>ニヤキ</sup>枝  
 奇<sup>ニヤキ</sup>枝  
 順<sup>ニヤキ</sup>枝



とく撮の帯もろくろ 振るく  
 久しよ根のやう 清夜後  
 山多幸の埒に明く 初あは  
 かあし若より 踊ふ是乃り  
 月うけよ夏の声も 追うあし  
 朝もはくくも 踏まをりけ  
 そのくもも布子れ 是れ去風小  
 又孝 活生の家 賢くあま  
 時ノくも花も 均咲ぬ 新 島  
 業つありく 是も 荳かむく

下ノ三

咲やあふ紙もさぬ 教乃月 困 風  
 業びまを 修る 橙の乃く 梅 窓  
 曆よび人あは 里も安く 居く 半 残  
 かえり 牡丹の名も 弘く たり 玉 房  
 秋くく 燭もあま 上も 明家 良 品  
 梅子あふ 角飯は 今を 蘇く 瓦 麦  
 吾くあふ 扇陰の 鞘と 下け 帯小 翁  
 くの 神鳴く 物 監の 心 養 本 白



馬の鞍踏くくもわろき久く花  
 かこ勢とせしは位遠繩のうけ  
 伊勢れ海よるれ素袍と折そき  
 歌のそくか 終る 古 所  
 村人よ突れ遠くくもわろき  
 鮫江門後をききとかりたて  
 遠里か尖そき事の極も其は小  
 月曇分こりれやを記わく  
 妹うりや海く極勢を生茂里  
 舟半ちく所庭のくせと紫  
 麦 刀 残 品 芽 風 麦 配 刀

花あくの末に夜製と脱捨く  
 如くうけく 慢路のけ  
 古の花小波と勢家もそく免  
 肩く持勢子使のさくひ  
 二 幼る香鬘くく凡中人里りき  
 叔きくく女中の子 追 芽  
 葬持りり志あり馬に表好り  
 女嘆きく侍竹の戸乃うち  
 後朝のまき子志解と配く連  
 脊中ハ空く路うちき  
 白 芽 品 麦 風 家 白 芽



町をたゞ様の中若ふよりれお  
 手紙花之名を猿塚の魚  
 歌詠めをさかく鳥帽子修多  
 漢りるーや 綾 ー 袋  
 七文字うねと叫ぶるそ先後妙  
 家書くそと何きたよ月  
 柿の本世の校書あひに美と挿  
 花くまを中一各や ぬ糸色  
 一ウ 漁り者の漁師いひる岸は衣  
 北斗は星紙包む村雪  
 白 靨 芽 麦 蕪 風 紗 白 刀 靨

春の風あふり日さく啼ぬる  
 松雪一本山世の神く  
 乞食くく花よ巻まる塵世の道  
 雛子く遊覧とあひる芥子  
 春白子くく解の物くく  
 思ふぬるの款冬を法堂  
 比呂火と焚あふる心より任  
 家ぬの春く琵琶の名を問  
 心川くく高蒲れ借子ささ小  
 月世の夢掛く世くふ夕暮  
 風 芳 白 品 麦 刀 芳 蕪 風 紗 白 刀 靨



月のあまらうとくは美しき  
花うららく恋乃いさうひ

え保三むすのそ月冬

園風亭ふねおと興行

連中九人

そらとくと揚る庭やまは峰	あまらうとくは美しき
花うららく恋乃いさうひ	花うららく恋乃いさうひ
え保三むすのそ月冬	え保三むすのそ月冬
園風亭ふねおと興行	園風亭ふねおと興行
連中九人	連中九人
そらとくと揚る庭やまは峰	そらとくと揚る庭やまは峰
あまらうとくは美しき	あまらうとくは美しき
花うららく恋乃いさうひ	花うららく恋乃いさうひ
え保三むすのそ月冬	え保三むすのそ月冬
園風亭ふねおと興行	園風亭ふねおと興行
連中九人	連中九人

下ノ六



夕風吹くや 影を吹くも  
 志向の風 影を吹くも  
 了ふ 独るむ 此の居る 孫のこ  
 せうらく 江戸の 草臥 乃 来る  
 糸を どのく びと 中 此 恩 此 寺  
 ち 何と 此 事 此 枝 此 乃 此 此  
 月 花 を 此 乃 此 乃 此 乃 此 乃  
 何 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々  
 石 塔 を 此 乃 此 乃 此 乃 此 乃  
 脊 文 伴 多 多 多 多 多 多 多 多  
 世 芽 莖 考 能 路 通

志を ぬか 介 伴 乃 乃 乃 乃 乃 乃  
 夏 踏 如 々 々 々 々 々 々 々 々  
 緒 帯 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃  
 名 到 ぬ 町 の を 付 乃 乃 乃  
 明月の 輝 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃  
 今 年 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃  
 萱 草 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃  
 川 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃  
 女 房 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃  
 鹿 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃  
 考 莖 世 通 葉 文 翁 龍 莖 考 能 路 通



去子節の紫竹と枝子幾多かり  
 田の草叶より流り富士垢離  
 故乃居月八日之のて奇一夏の月  
 酒一わと名と竹を春満ち  
 病接く縁白満ちある花はより  
 さら〜く向くも空ハ七人みり

聖 文 翁 世 通 龍

え縁四花つちわ卯月

連名八人

海多月〜千所幸き面幸り分  
 霞居ふまつ〜戸と〜つ吉月  
 子指葉をとまを〜仕由〜用は  
 人〜〜と赤過の船下所  
 猪棚の舞を〜見ゆ〜田舎挽  
 畚下け〜舟の〜を捨ち〜人  
 居〜あ〜ぬ雜狀時の夕るる  
 神唱井〜ぬ娘〜ハゆ〜

及 肩 珍 碩 之 道 昌 房 正 秀 探 志 道 碩 房 秀



然く抄く合母の常多り也一  
批きく空博奕をく知る  
月の茶酒入りせハしきをわく  
茶証前あると守れ雇人  
上張く鶴益む向乃りけ  
日移く世をく一翁の朝明  
手く中振板ゆらふ毒畫  
為い作是を歌去乃入州  
二 福原亦砂川流る長栄さま  
羽織をくゆく俣系り如也  
道 房 志 道 房 志 秀 道

切山く一胡起あく五六日  
茶証体む喰もの物一  
母親の仕立く見せ了婦入良志  
恋くくさく山く一且那山依  
江戸店を特く在而の門くぬ  
麦と前より香小咽れかき一  
役引れ多倍又重く一せくらきく  
雪の小面く一志并生ゆる  
志くく一圍の仔細簾漏る月子  
心を昔於秋乃るよる  
房 秀 房 志 道 房 志 秀 道



山<sup>ウ</sup>烟の末綿を流く風乃若  
 石地の坂に帰る云屋跡  
 情張き糸弁れた大工吐し  
 歌に跡す奈良の溜上  
 妙、廣さ幸と花を挿らる  
 かぶくまをまゝ春の明海の  
 秀 肩 道 石 若

蠟かふふもや初秋の日南哉  
 葛もくく吹帷子也の鼓  
 小灯とさつぬ萩子無捨く  
 釣しくまをく魚乃揚  
 一通りもそ袴子もる胡月夜  
 多々終るくと脊中うこま  
 赤明くいと水ぬ人と好い子  
 手水流うひも出る西うけ  
 の干れらつきかろく老る道  
 うり掛くくまの小さうね  
 去 来 路 通 夫 州 惟 然 素 通 州 然



夕乃嘗 毒世 毒落 して 立 悔り  
 泥 ち ち け 早 乙 女 の され  
 石 佛 い つ 是 欠 ぬ 八 十 あり ち 里  
 牛 の 骨 ま ち 朱 流 ち ち ち  
 酒 此 流 ち ち ち ち ち ち ち  
 室 の 八 島 ち ち ち ち ち ち ち  
 陸 奥 ち 花 ち ち 月 の ち ち ち ち  
 瘡 の 美 妙 ち ち ち ち ち ち ち  
 解 好 乃 友 ち ち ち ち ち ち ち  
 裾 小 刀 ち ち ち ち ち ち ち 菜

然 州 通 菊 来 然 州 通 菊 来 然 州 通 菊 来

ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち  
 瘡 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち  
 序 是 流 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち  
 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち  
 位 多 ち 連 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち  
 島 の 中 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち  
 巖 井 ち 態 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち  
 松 割 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち  
 屋 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち  
 山 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち

然 州 通 菊 来 然 州 通 菊 来 然 州 通 菊 来



子 祝うえく啼く母りり多季  
 多りの中ふあらす早桶  
 このあき序例中立掛く  
 飯苞かしく夏を立れく  
 佛ふかしく花をまら  
 菜と摺髪れふき明木の  
 未 然 竹 通 菊 未

月尺きふ庭子美き龍も旬  
 庭の挿れ葉を叢虫のかれ  
 火桶ぬる巻れも縁の牙に  
 別當面の古交枝持菜  
 尾尻世目あ度り中つる端小綱  
 正家くせんある川の水り  
 舞宴とあふる人あま菜少巻  
 雨の曇れ魚般麻やをぬ  
 一しゝあからきく跡る市此竹  
 遠か龍子の飯はむかを  
 菊 尚 白 菊 白 菊 白 菊 白



いさか〜とさか〜魚をる池箇 白  
孫婦と鴻ま〜く別は信法く 白  
月の花む〜と〜あぬる小屋柱の 白  
拵授るるかやあま〜る乃虫 白  
伝發る髪ハ芳色子秋ふまて 白  
大工乃拵細行る辻交 白  
三石柱様来や〜ふ花さ〜と 白  
ハのりり〜と考れ吹降り 白  
雁帰るふ根子其のむろりて 白  
うち驚る馬〜と正於エテ 白

高人の拵〜と〜と〜と 白  
〜と〜と〜と〜と〜と 白  
燕コウの香りよ〜と〜と〜と 白  
異々ふ〜と〜と〜と 白  
調のあ〜と〜と〜と 白  
〜と〜と〜と〜と〜と 白  
昔の若仁粟の心白れ風立て 白  
〜と〜と〜と〜と〜と 白  
〜と〜と〜と〜と〜と 白  
〜と〜と〜と〜と〜と 白



西行の無言此うちの夕鳥雲  
小舟ちうくく世を遠かり  
うき世の屋うて晴る日の空を  
あはれ掛て捨る宵に葉  
窓明く雀と入る水の花  
折敷垣はいろく乃珠  
白

清明に清くあそびや樂を  
月内わが家庭のこひと  
藤のを國を葉と花にあらん  
手拭帯小し知ん力なき  
廣敷のまを飯と人よ世をせて  
又あつゝある奥の焼や  
糸糸石小糸盤斗と中置  
響と透す銅かみ  
山はさし侘びれし物と年かりて  
狂奇乃佳果と何にかしらり

探志  
正秀  
昌房  
盤子  
翁  
及肩  
楚江  
志  
秀  
翁



空々素合のその振舞人知可自  
 小鳥飛く川袖垣のうく  
 名月子か里やと有か一處りる  
 新渡の碁石のふりくとして  
 清く事なげきとて思とさう白  
 子のぬもやとて幸あくる無  
 咲花村囀ヒキりて夢の表久  
 牽牛ヒキやせりる月丸やる  
 帰ニりて了井のうら一をす遊ニく  
 夕ヒキりてほくは臨乃嬉  
 子 秀 房 肩 志 角 江 秀 房 子

空々半ヒキ遊上るうらも三併  
 湖水知所く物よさりてす  
 遠島をもの静たる波田の契  
 鹿の沖くこれほを松明  
 むさるさそと古敷ゆま月更く  
 名跡をたむむ庭の葉葉  
 陸奥や郭の葉枝と出仕舞  
 心ヒキりてあゝぬうほきと猪立  
 おろこ小男世帯の葉れ安ふ  
 夕ヒキりてあゝ事には法華何とま  
 子 秀 房 吟 志 房 秀 房 子 秀 房 子



一振の簀よりぬけ神々の園 秀  
 津楢隠止く祝舞よまゝ 子  
 風節〜行な〜所と吹海々 肩  
 馬ふふ〜も程〜 江  
 雁り鶯花白古けるり花の春 肩  
 海〜〜と〜長宗あ〜松 菊

中あ〜〜と〜い〜や月の雪 菊  
 船を〜あ〜〜と〜い〜と〜あ 成秀  
 花〜免き〜吹〜折〜ぬ〜花の紫よ 路通  
 鶴〜〜〜〜〜と〜喜〜れ〜せ〜ら〜き 犬舛  
 〜〜〜と〜眠〜と〜と〜と〜驚の碎 惟然  
 城〜と〜と〜ぬ〜た〜夕〜立〜乃〜親 格睡  
 我〜〜〜の〜〜と〜別〜と〜淋の〜を〜記 正則  
 石は華毒の事付張よむ 楚口  
 鶴 勝重  
 念はら〜〜日と可あ〜〜り 華香



松子まよりお冷小僧の打違て 兔苓  
 流と隔る 若乃 大竹 正秀  
 月影よりこね 垂るる 向のそく 則  
 たくちりくきまを唱 重氏  
 細くはれ 袴より杖をうら 重口  
 髪のお髪をく 朔月付より 翁  
 年々れ 必まなす 交れ 杖  
 きり 家車もせり 燈臺の日 則  
 二 老の葉乃下を 芥と吹落し 睡  
 呼とのも 流よ 夢なり 正幸

かけきほく 文玄中ハ戸をさそ 江  
 いらりの ぬく 流をく 来る水 苓  
 汗臭お人も 必きを 意 ち身 香  
 世知んく 髪も 煙爰を ぬき 守 然  
 風中く 流も 俣の 流し 舟 香  
 唯一なり とき 此を 保まの 通  
 ろく 古記 都れ 着 袴より 業  
 身えと 出く ち 袴より 竹  
 秋風子 細の 定やく 石乃 突ぬ 苓  
 粟心 ち 糠の 夕ア さいり 正  
 睡



十序掃あり子ハ表さる子持跡ノ  
 必細き刀の及り申と見えよ  
 長椽ノ銀去蓋とらちくたき  
 かとときん鳴くおのゆよりり  
 穢人の水何くをせ家花の燈  
 菊毒ノ一恵むまの叶  
 秀 重 柳 秀 絃 五

連名 十九人

うかろく死穢の植並の朔日式  
 存もくは是を後池の魚  
 公發のうちしり張らちりおく  
 蠟燭の火は葉くふ夕月  
 糸すれく後香の廣葉より落す  
 ちかりく乳と名あるむの子  
 突ちんく心訓條あるむとさ  
 身ハ皆賣とたつて悟く  
 天窓はきと秋と八定あるは  
 金塔ノ一の洞の灯  
 路通 昌房 翁 正秀 野経 乙師 萱好 珍石 盤子 里东



田の中にかくつも雀の赤るゝひ  
 芝居の札れ来何れ免り  
 山嶽よりかきの月夜の様れ  
 夜きそいふむる帯れ不ころい  
 月影の二階よ後と突上る  
 蕎麦れ白ひふびやく下積  
 うきろふやゆ子の志れさうり  
 東風吹去ほる葉水の籠  
 鴨の精り介うう冷ふらん  
 夏腐上子よ物く客待  
 称志 游刀 秀通 好 糸 刀 子 秀

招何る義理を修て泪らみ  
 暑れと捨一えの姿鏡  
 うとやうに去子も物さふ子の  
 湖あささ月月の廻廊  
 うまのあが岩屋の坊さうち  
 つかおののき夜啼り守虫  
 りも矢もほさうし心亭に孫あふ  
 ぶ髪はくふとを簾の合と目  
 可も奇簾小猪け掛立く  
 粟の胃小伸る筆也る篠  
 列通翁秀子 好 翁 好 篠 經



文ハ海老ノ三史文選ウラ一書通  
 坐銀井一ヤリ盃のうら藤刀  
 押一ノ海風を終よる一ノ房  
 草履踏こむ居風呂の漏 次子  
 肉裏達布とんを家と花れ者 頑  
 燕ハウ入り化やのな彦 経

漏るぬ海とく六州由よ草れ魚子 斜炭  
 火知ら何草小冬れらとい寸 如行  
 一平の仕事い麦よ抄さ旬りて 菊  
 垣ゆふ舟とさ一由是かあり 荊口  
 うら連くく弓射小ある有明小 文鳥  
 山くくお筋と持る小坊主 此筋  
 秋風小猶うけわをを長田都裏 左柳  
 雪れくくと草履小さあ踏 怒風  
 編帽の管い被るる山麓の縁 行  
 念佛やのきうの細いゆい 残香



おむとほめしは小袖何て宛て  
 千川  
 雅居士の恋此あはれかた  
 翁  
 奥住居るこの表ハ戸を志き  
 口  
 年暮さしそこの管よ初  
 嚴  
 鞠おろさるハ雲とらち拂ハ  
 筋  
 峰より月此時そくそく  
 鳥  
 夕月花の系よ尾と遠らそ  
 翁  
 目利そそと送る水りり  
 柙

去白ひ推よりふしあ仙花  
 翁  
 土屋葉屋のなまゆき  
 白雪  
 朔ろ紫を形すすもれ  
 桃隣  
 早ふ世分の吹てこふあり  
 芦雁  
 洗濯のいとぬと世ふ  
 支考  
 蹄蹄よわし  
 以之  
 森所よ囀ひ集る  
 扇車  
 何うたうや鼻を  
 清水  
 おまぬやおろく衣よ  
 極先  
 教馳めろ  
 作らる  
 極後







何の家をよふ新酒を志りて  
之馬極意居る門前の竹垣  
千物の造かゆる一々終  
先衆此志のみく思ふ小将  
雪咲花より柳のさくらを  
摺り車村とくさんて  
行く水

元禄四年冬

白雪亭より奥坊

依連十二人

吾控居る碑の御小松と歳と奥羽乃  
とくより西の園くハさくはくして  
傍湯の果と  
欠りて宝曆二年秋九月ハ  
標品荒陵  
山北土生山津春禪寺ハ從二位家隆御  
文館の旧館之土正は丙戌の秋  
室繼縁海  
の并奉ふて兼法二已去  
豊山和為再  
達治為行御よかの回跡と  
慕ひあひる  
を門人等件々居るとかり  
求ふ縁寓や  
あふあふ為自身令  
竜居とかりけあふ  
中縁小よつと一隅乃  
松下江為の古碑と  
きつまで何り千  
町荒陵山北土生山重  
龍居什物の管搜一  
尺に三ふ仙外小



十六卷の句集冊一枚續猿蓑集その  
 外ゆるし記及言十枚とあるひんりり  
 こまろくまの金龍庵什物之りる碎也  
 垂れゆるし紙裏の志あり此追加と云  
 きのちあき

歌 俣

ほふくくし掃木汝りく板雪式 至嬰  
 竹のくら川まこと初ゆく 惟然  
 朔月小鷄さびく尾を物中く 土芽  
 ちんちんす侍布と豆腐賣し切 雪芝

大八の通りりりきく狭かろく 猿 雌  
 歩きの影く細きる若く 弱  
 瘦かろく水俣花く川勢て 卓 袋  
 井中く牛と網布くふや乾 九 蒔  
 嫁の素く裾くね門はわら 芝  
 杖くき履を乾くくれく 翠  
 一住ひをまき立つる月夜乾 然  
 籠釣なり籠念れく 雖  
 大鳥の海りて田ある細く毛 弱  
 蕎麦粉と巻く帷子の裾 俣



立方くく文出て朽く足場の端 雖  
持指手あく祖母の泣く 菊  
志九く花の本懐れ一あはく 芳  
七未やうきき小乃夢風 雖  
旅翁屋りしを雀の鳴入立焚 芝  
あくひのわら死るを養う 備  
冬枯の九年母井むお度い 菊  
あくくくまれ居風長の漏り 芝  
持繪の一間床よふ心 翠  
何やうきいりしをわく 芳

舟の口入きしれあう道 市 蒨  
茶春くく後の古記小茶籠 然  
男何とて又見とくあう絵の挿板 雖  
と七に年志の逢板廿の松 菊  
五明下しきく痛て馬と駕 備  
あか時あうり既痛止くり 蒨  
川まくくあまよして置萩の門 芳  
心とりた下かまもくふ古竹 芝  
あくくや煙管に竹る貝の壳 雖  
以ら月啼の度くを胡風 然



はらりと花の行幸のさゝいよのふ  
柳のくはらりと古子のあはれ

跡の蚊のしぐらよてあつた雪のふ  
解きあつたに又よるはな

夕月のをりし梅のやうなふりて  
雪の梅のやうに咲くはな

牙とせよと免る人連行をたて  
あふらうけ置あはれの

あふらうけ置あはれの  
若藪

ウ

煤萱と目利のうらにけけ  
物りくきふと北門の鞆に

大木れ枯ハ枝のちくむたかり  
野よ麦あしてあまの次俵物

ふはよけいあるて来て札紙を  
一里行て元やるととらふ

掛りの布袋の形よ月さして  
百村あつては蟋蟀啼

秋風の音を流く川の上  
からあつた舟と先あつた

からあつた舟と先あつた  
芳



義法ふいの〜花の咲掛ひ  
 連 まゝかゝる考乃 唯 獲 蕪  
 二 永日のあつ〜切目撮 虎  
 何ぞれ小滞る 司の不 麥 苙  
 のよきぬや余ほく〜も未ぬを 麦  
 は未替りけく 採ふ 芳  
 空竹の枝此節よむ 虎  
 ち〜ぬふ海と互に 薊  
 著る〜と 薊 薊 薊 薊  
 さ〜さけりけよまゝ 薊 薊

じきかりや月よ同〜くもろ那 薊  
 葉書このいとれと 薊 虎  
 ねりひき〜る 薊 薊 芳  
 よふのま〜る 薊 薊 薊  
 此巻末満三十句 薊

詠福之連歌

表りやそりや北斗の星此 薊  
 節れ喜こり〜河うらふ 式  
 一は〜の鶴のあ〜 芭蕉



海に釣く白面を垂し  
 盃の茗とつらふ人業此月  
 猿押はしに衣乃衣子  
 善為の着れうちに入知い  
 高らに小祿宜の宿よりし  
 桃灯とらふせといひ鐘の音  
 淡衣母織を舟し白川坊  
 道くとえよけ人おみ幸く  
 市よ名海の家おしりり  
 宵の月飼おく鴈を餌と喰せ

夢牛 村鞍 槐市 梅野 蕉 牛 之 百 窠 市

色はらりきく秋喜山の秋  
 手習は衣知張よりとり侍  
 籠子しし遠くおとまき系  
 杖突く登きこハ坊の花の場  
 空暖く念佛息家  
 春は青く猿子小寺と舞せたり  
 翠葉の屏風は法を掛け  
 面影よりかきくる度重子  
 衣着れつり香風知る  
 ちんちん穀の喜れるなり

村 蕉 窠 百 村 窠 蕉 牛 之



野々雀の藪下町  
柴賣の市村  
の月も晴  
舟漕男ふ  
子供等  
しきの  
狩衣  
幕  
鶏のうらふ  
花の  
葉  
之

細うら  
初春の  
鏡  
市  
場  
を  
提  
て  
房  
村  
百



祖海奥州の能事小歳ふる白く  
尺野たる端短む何れとせりは  
愛よ春情の心小結るる白法ま  
見一情とも通ちる千ある世を  
此の紀行名所の道守ありと  
あさかしく春をこれと

羽をそ 伊佐松島より片あつろ

松一夏の月ふふやとてまめ  
人ふゆきりて松風り別楚よ  
若の戸も位かろる路終難の家

春もや 夢と伸ま草也



あつろ一え緑とせま島  
舟より千位りて船と何れ  
送るる途三千里たねの  
ふけりて初のちまに  
の洞をとく

新也や 多啼魚の目とあま

臨初室の八時あ  
いそゆふはほくろ燧の  
田家小春の夢はあ



山相のう子を吹つと春れ音

ううその瀧

おとくま守ううう瀧のうう表

於此神々神原系一見せんとあを  
殺生石もんむといふにたふふ  
俄小雨降あゝぬまはは下止り

為来くやう久の宿れ郭云

於此地温泉の神相殿より  
八幡宮を後一もりて西神  
一方小洋をあらふ

湯と絡ふ松丸お好く岩清水

むまゆよりとや嵩よむく泉哉

殺生石

石の系や夏州赤く夏黒く

おかしき日教をたふすにふ川の  
国中ついでて娘のまにまに知  
ふ門より出く

葉書の名を水鶏ふ守ふもの

子苗もれ我を思ふ日教あか

西う東れ先子苗ふも風の音

松葉のりもくは  
春れみよりまはや小枝葉は風よ



吹たぐめくく屈ぬおのつうくく免  
きうかこうく其意色宵然中  
して美人の顔と猪ふちくやあ  
神のむくく大山其このおせくやを  
まや造化のまうつこのくく  
まの付をきさうせ

海くや中不碎けて夏の海

松をよや水伐夜宿るく夏也の月

秀松崎これまといひめくと名屋  
のくくく松田の海士ふあくく  
松のふとゆふく

松の花 名をいふふ来る序うか

秋鶴亭の任系くくく

山 とも海志うくく入るや交坐猶

中松の園よりくく俾遠流  
天音法師

松の魂と母思くくくえせ法の月

新居風流亭くくく

おれ勇砂室をくく柳あ那

風の息も南にちりくくく上川

涼くくく海くくく海くくく上川

五月面や河つ先て涼くくく上川



異死見代海へ入りし 春と川  
移しや小鏡を如母に初花子  
何つと山や吹浦のけしき又涼と  
花と云と一ふよ丸のさかり家  
杜宇鳴きや 古来 歌 歌

象馬の系を小隙に象馬の娘の  
とくさひのそとを忠しむとて  
地勢視となやまふふ似たり  
雨や西旅り合秋の花とつる白  
こころふふ

は鏡や産腔ぬれく海涼し

夕晴や様小生む浪乃き舟  
小鏡はを柳涼しや海士り行

戦後の山出を雲傍といふ所より新酒小後る

海小隙るふや春了死うきさ身宿  
菜園のいつは花と叶あつる  
涼しや 江戸の穉さ山の月

加賀の園小入産は式草庵小いさかひにて

子猫の香や分る者ハ有磯海  
秋涼し手毎小むけや丸前子







湯丸尾

月よ多し色もくもくや危庵の秋

燧り燐

義仲の森さのらる月出

十六日ハ雨降りれとは雨より止むる

名月也北國日記さた免る此

月如き雨よりお撥もるりけり

待り時りて

月つとて待りハ沈みたる海の音

何の雲ハ格あを待りあより部

十六日ハ空晴れと満ちての小貝  
部ろもんと待り候ふ何そふ

さむしきや沈み小徳さる浪の秋

浪のりや小貝のよはる秋の暮

そ日何れ候り等哉小舟とさる  
さる寺に沈み候通もは浪を  
出むるさるる浪の由と候ふ弱小  
あはけりて大垣の森より入て  
かある別荘より暮

筑居く本れ美草の実むらんや

本因亭

隠家や月と雲と小田三反



葵の素生のゆへに大垣の縁店を  
訪ひ置けりかの夏高きとさうさうひ  
きん花の家被れむうに白ひく  
孫の實い俄結よせん花の跡

如行亭

瘦ありくころか記集れ答うら

如行り席上の餐意を割く

ふ家れ舞し記味とわさるるか

斜嶺多戸をむけし西平山  
何り伴吹山といふ花ふもよき次  
書法もよき吟唯是孤山の懐何り

其は、午月もふれあり伴吹山

約中たまけられて大垣の店よか  
若良も伴勢より集り合戦も七  
馬ととせめてめ切の家子入り集り  
菰川子前日父子を外志う死ん  
目録とあひて蘓生れをのま  
うとく且悦ひ且いとまの縁れをの  
らさもいさこや下はるに長月六日小  
なれも伴勢の辻まおかや人と又  
舟とや集りて

縁れあこみよわりきり秋也







又後世ハ極まをえれハ此ノ秋  
多むて何れ月鏡堂の窓と家とを  
風懸と吹てるを縁歎さるハ作を  
角髪や髪とや母の相撲を  
ハ羽やまの橋をきく子髪斗

又々竹部

櫓の形波と打て揚砂る若や洞  
若若ハまゝ一具王ふ若後ハるあ  
盆ハ此冬若ハ年ぬる若う若

乾鏡や何来辰ハ毛唐人  
若の竹節似る趣う節あらん  
月ふし沙走ハ子語る森是哉  
一休の古若若人年 かの市

喜の部

喜立や新 年 瓢瓦采五升  
伴勢り賣家よりあり子代の若  
惟やこのひあや似たりと胡の喜  
梅ふしきのふや霞と吹雪



藻子まきくふ魚七子にくは清ぬ下  
音速き四の谷過り紙州履  
茶履の尻折く帰らん山ささく  
母よりさかるとはも念佛中なり  
神「こまらん田隠の誓れをささか

夏に部

松風の扇葉に新れ音涼く  
馬不色く森と松よりる夏神武  
夏山や秋より夕日の一里鐘

牡丹花葉ゆめく分あつ峰のふたは  
紫陽花や悦子と花の蔭法師

秋に部

まきく藻く残夢月をう茶の烟  
森と色く四の字世はくのとや  
月や花の鉢に木乃日れあそ面  
川舟やよい茶よい海よい月花  
茗の葉やむむくめきこむるぬ葉は  
秋のせまのよて願台子かくまらり



刈係や子揃うくくの鴨乃亭  
稲藁を子よつる家れ乗燭うふ

冬 廿二部

冬牡丹千鳥よ書れおととき奈  
志の海よま履我捨ん笠時白  
一匹れまもひもり月か香  
むと時白礫やゆりて小石川  
香と雪と宵砂走れ名月秋  
雪つ地回子表の花もる物うふ

何くの子れ去よりおらる火桶うね

又文字長白世小んやうなれえ

冬の日れ身ハ竹舟子似るかか  
竹舟や汝の親の小亭系

冬 廿三部

叡慮あまり振入民や庭窓  
正月を羨惚とあふまや国月  
春立く満く九日れ野山うふ  
香より自を丹なる墨の梅れ花



を流く此の柳子満のさくく  
草の陰咲くかゝるか 瓦 毛  
鶴は巢もろくろくむの紫絨の  
系中やまのうもほのま鳴雲花

夏の部

月尺てもそのはくはくや浪々の夏  
白折く思ふ事ふれ子苗のさ  
南くはくひ長良の川に鮎鱈  
稚魚生くく家歌青く翠月を

悪くくくく荆をけくむ雪の那  
六の雪田あれ月ふるく魚えん  
さく稚鱈は遠登く清水のさ  
竹のちけいさくくんせくや時を

秋の部

家晴のわくくく白や雪ちきくれ  
はくくくく特を井寺のつづ  
玉川の水よ井をきき女席花  
むく面鏡脊中に魚くく葉胡蝶



寺に暮くはこと歌あり月見家  
盃の下りありや 朽木盃  
さるるや打子掛ききあくは

文の部

冬を遮や月水いとあり雪の考  
神の光よとれくきく濃嵐  
見ありたるまきく換や河豚汁  
し何時由初の字記家くまに

白戸と出るとく  
焼あのか

下相  
いやこかえとく  
光の初るうれをく  
と神をかたしきき  
下空はあきやたび人

あひ人と我若よとれ人初時由







春の部

昌隆の松とくはるぬ清代乃春	利重
口海かろき奥のきく耳のやま	嵐雪
志川や織清階よりふれ妻厚	存兮
月花のり宛を装巻ればより	釣雪
え朝や何ともなれと逢さる	路通
乞日の木此間の競るはゆか	重五
小楳子栗や花依る人妻乃門	舟泉
曙の人花牡丹あそびにたり	杜国
さ海舟やぬふひの面いかた	氣彈

己の年やむくの春れ松のけ	荷兮
池子し鶯や候名虫習ふ柳うけ	素堂
鶯小底のゆきを流さるる	土房
春の心時代と啼の今夜香	巴丈
臨分家香ある物けたはやあ葉	惟然
そのとりふ女もふ髪の手を葉うも	風国
輪子踏ふ葉をゆけぬる月あか	嵐雪
は梅を遠く月れ白ひの那	、
依是き心抱くおらつる猫の意	若芝
多作とる中し小落たり戀月	春来



吹衣 吹や目を切えゆる 驚翁の肉  
 越人 花子とうきりて 羨より 悲不致  
 去來 あり 籠子 毒や 繁著の 残れい  
 嵐雪 必多の 酒残 吐く人 花世の  
 卯七 残炮 此 久さ 浪よちるや 山さる  
 落松 蜂の 盤小 白ひうつく人 花の 葉  
 已百 一 疾さる 監人 中 あり 屯子 僧  
 宗祇 穴態や 日暮の 山世の 途さる  
 丈艸 巽越 一く 爰も 後く 人さる かの  
 乃 行 春や 星も 嵐を 春乃 持

夏村部

嵐雪 穠を 踏よ 捨るれと 捨る那  
 交考 五位六位 色を 記交 せて 青麓  
 一井 卯に 花子 新里 過たる 異乃  
 胡及 いら せん 何を 男あり しく じう ぶつ せん  
 其角 藤の 赤花 かの 何さる 雲の 盤家  
 去來 たり 卯に さく 濤よる 友に 炭依  
 風因 五月 雨の 多き 終る 月 暮り  
 元 南 堂や 空きく 宵 明の 時 暮







新 庭 之 階 の 窓 や 月 夜 戸 本  
 元 山 の 砂 子 小 松 や 初 春 賀 枝  
 具 足 若 々 秋 の 多 多 月 見 舟 野 水  
 白 鷺 の 間 子 々 々 月 夜 如 舟  
 奥 深 子 月 月 隣 此 指 加 那 園 友  
 有 吹 小 籠 子 々 延 喜 の 仕 業 分 路 州  
 名 月 や 濱 辺 の 鳥 乃 長 々 乙 由  
 秋 舞 子 々 々 々 々 々 々 々 本 節

冬 之 節

来 々 々 々 々 々 々 々 々 々 野 水  
 妻 の 名 姓 何 々 々 々 々 越 人

五 節

舞 姫 に 裁 衣 拵 拵 拵 拵 荷 笥  
 お 々 々 々 々 々 々 々 々 魚 白  
 む 々 子 々 々 々 々 柳 玉  
 鈴 鴨 の 聲 々 々 々 々 嵐 雪  
 鹿 乃 々 々 々 々 々 酒 壺  
 木 乃 々 々 々 々 々 六 六  
 何 々 々 々 々 々 湖 水



まろく廣お空居の茶れ中や冬然 本因  
澤居の若氣世と日や名れみ 嵐雪

延喜寺

張たすふ沙衣をて下れ念ぶ

年の暮

柳をり我り庭足きて梅の花 園友

子枕よ花の爰又ん少く志 信品

下ノ四十八

日本紀 古事記 紀々歌集

加茂真淵公翁 門人諸鳥輯 全三冊

正徳の形巻

加茂李鷹鳥輯 小本 全二冊

御家流市川先生書

同筆

花鳥往来全二冊 消息集全二冊

大橋宗桂先生撰 将基啓蒙精義 全二冊

御溝口先生書 家書札文集全二冊 流 詩歌文集全一冊 王尚帖全一冊

語息齋詩文集全二冊

文化十一年甲戌五月 日本橋四日市

東都書林 上總屋利兵衛版



